

〔茶道望月集 二十一〕一夜込の茶請料理の心持は、餘り手の込て働の有は不好、只随分暖成物に玄く事なし、必是をかふと云事はなし、寒氣の折、夜明テ早々食事する銘々の心持にて、取合如何様にも可有工夫、繪さしみはツキなき物と可知也。

〔茶道望月集 二十二〕一茶請料理の事、夏は涼敷仕かたの玄かけ計にてよし、冬は別て寒氣強き霜臘二ヶ月の中、心掛悪しければ、かげんさめはて、不興成物也、もと茶の料理は、數を少くして鹽梅を第一と心がけたる物也、夫ゆへ座敷も小座敷を賞翫して、人數も三人よりして五人に限るとは、膳を出し揃へねば、客中食はざる禮法なれば、何ほど勝手にてかげん能仕立ても、座敷多人數なれば、其間にかげん損ずるとの吟味也、又菜數多からぬも右の趣に同じ心得也。

〔茶道獨言〕懷石料理とて、其文字さへ辨へぬもの、茶湯など、いふてめつたにふしぎ奇妙の料理をなして、其見るのみならず、食ての上にて、互に額をあつめて、何なりしやなどいふて、面白がることいかゞ、亭主も客も其味ひを忘れ料理のはんじもの、やうに心得、玄きりにおもしろがり、其はんじもの料理を書付などして、嘶し合ひとなど、何とこゝろへしもの、にや、總じて懷石は、前にもいふ如き心得のものなれば、必々ふしぎのものを出すことなけれ、誰もよく見まりて、人々きらひの有まじきやう、正風體のものよし、奇妙の料理を出せば、客も何とも玄れぬものながら、これはもし我きらひの物にてはなきや、いかゞなど心づかひ有べし、大に禮を失ふなり、最初見るより玄れたるものなれば、これはわが嫌ひのものと思へば、箸を下さず、其儘にして置ことなれば、主客ともに心づかひなし、また辨へぬもの、此事をきけば、食へ共其味ひを玄らぬなどいはん、わけもなきことなり、誰にもせよ、是は何々といふ様に、常々喫するもの然るべし、多くは異物を珍味と心得る人多し、皆まちがひのことなり、何の懷石料理の事あらん、おかし。

〔茶式花月集 四〕一主方香合取入レ、膳出可申、挨拶有テ勝手口シメル。